

# 感染症発生動向調査委員会報告 5月

## 今月のトピックス

- 季節性インフルエンザとしては、市内では B 型及び AH3(香港型)の検出がわずかにみられています。
- 伝染性紅斑が例年よりやや高めの水準です。

### 【患者定点からの情報】

市内の患者定点は、小児科定点:88か所、内科定点:57か所、眼科定点:18か所、性感染症定点:26か所、基幹(病院)定点:3か所の計192か所です。なお、小児科定点は、インフルエンザと小児の13感染症を報告します。内科定点はインフルエンザのみを報告します。従ってインフルエンザは、小児科と内科で、計145定点から報告されます。

平成21年4月20日から5月24日まで(平成21年第17週から第21週まで。ただし、性感染症については平成21年4月分)の横浜市感染症発生動向評価を、標記委員会において行いましたのでお知らせします。

### 平成 21 年 週 - 月日対照表

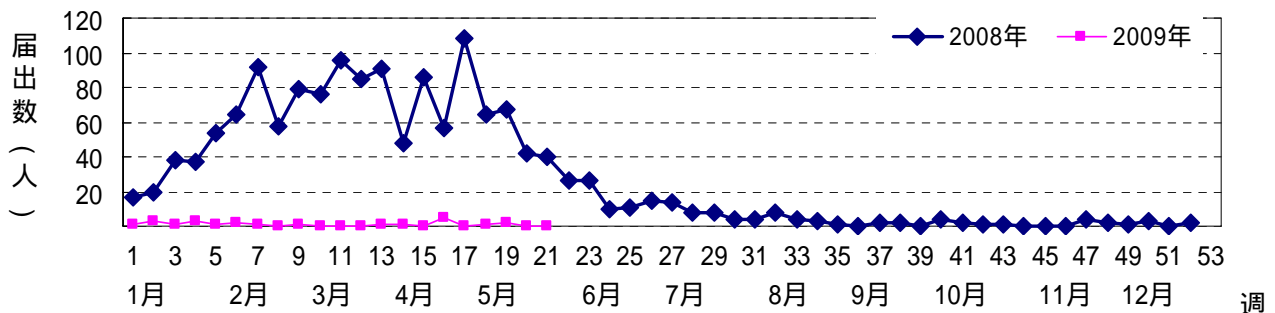
第 17 週	4 月 20 ~ 26 日
第 18 週	4 月 27 日 ~ 5 月 3 日
第 19 週	5 月 4 ~ 10 日
第 20 週	5 月 11 ~ 17 日
第 21 週	5 月 18 ~ 24 日

### 全数把握の対象

#### < 麻しん >

2008年から感染症法における5類感染症の全数把握の対象となり、診断した医師すべてに届出が義務付けられました。(国立感染症研究所ホームページ <http://idsc.nih.go.jp/disease/measles/index.html>)

週別届出数の推移



2009年5月は27日現在で3例の報告があり、3例とも予防接種を1回受けていました。

ひと月で100例以上の報告があった2008年に比べてかなり少なくなっていますが、未だ患者発生がありますので、予防接種を1回受けていても、麻しんにかかっていない方は予防接種を生涯2回受けることが大切です。

2012年の麻しん排除に向けて、予防接種の徹底が最も大切です。

(日本は、2008年～2012年の5年間で、麻しん排除を目指します)

風しんとともに全数報告疾患として、発生状況等を詳細に把握  
1歳および就学前1年間の、麻しん風しん混合ワクチンによる2回接種の徹底  
5年間に限り、中1及び高3相当の年齢の者への定期接種を実施

＜腸管出血性大腸菌感染症＞

5月の報告数は、27日現在で4例です。今年に入って13例の報告があり、血清型の内訳はO157が8例、O26が2例、O111が1例、O145が1例、不明が1例で、性別の内訳は、男性11例、女性2例で、年齢の内訳は、10歳未満が3例、10代が6例、30代が2例、40代が2例と、10代がもっとも多くなっています。毎年、夏に報告が多くなりますので、注意が必要です。例年レバーの刺し身による感染が見られます。

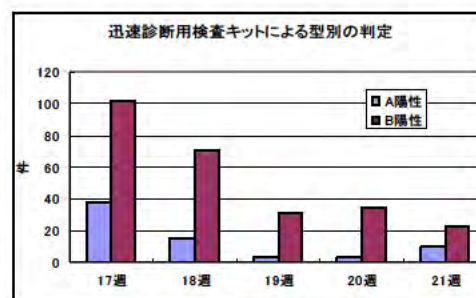
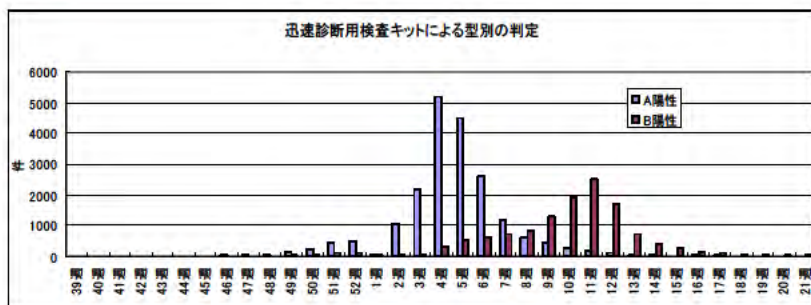
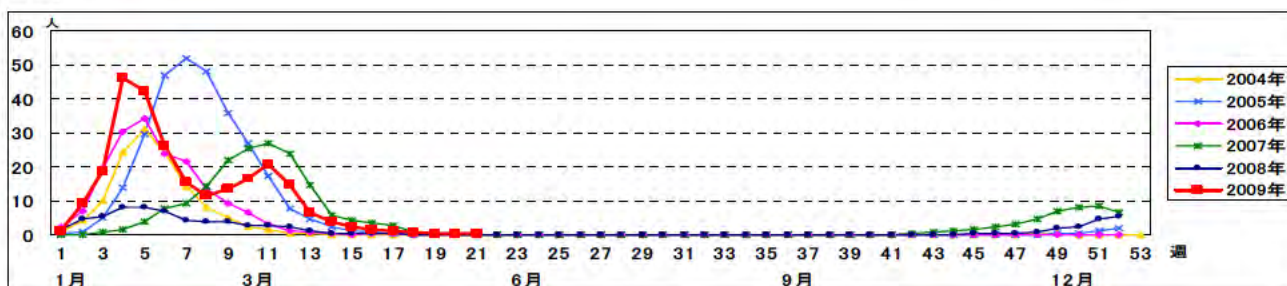
啓発用チラシ「O157に注意しましょう」

<http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/punf/pdf/o1572007.pdf>

定点把握の対象

＜インフルエンザ＞

今シーズンは、過去5年間で最も流行開始が早かった昨シーズンに次いで早く、2008年第49週に流行の目やすとなる「定点あたり報告数1.0」を超え、2009年第4週に流行のピークとなりましたが、第9週から再び増加に転じ、第11週にもピークとなり、二峰性となりました。迅速診断用検査キットによる型別の集計から、第一のピークはインフルエンザA型、第二のピークはインフルエンザB型が流行が中心である可能性が推察されました。第21週は定点あたり報告数は0.32となりました。行政区別では、磯子区(1.43)、神奈川区(1.14)の順で多く報告されています。川崎市は0.26、神奈川県(横浜、川崎除く)は1.17、全国は1.25でした。



迅速診断用検査キットによる型別の集計では、第4週をピークに減少し第21週にはA型11件、B型23件の報告です。迅速診断検査数に占める陽性率は66%をピークに5%以下に減少しています。

また、今シーズンのインフルエンザA型ではAH1(ソ連型)が優位でしたが、4月28日以降に新型インフルエンザに関連して行った発熱外来等の検体からの季節性インフルエンザウイルスの検出数の内訳はAH1(ソ連型)2件、AH3(香港型)61件となっています。

＜A群溶血性レンサ球菌咽頭炎＞

去年は、過去5年間で最も高い水準で推移していました。今年に入ってから例年並みの水準ですが、第21週は2.51と増加傾向にありますので、注意が必要です。行政区別では港北区(7.71)が高く、次いで保土ヶ谷区(6.25)、瀬谷区(5.75)となっています。川崎市は2.64、神奈川県(横浜、川崎除く)は1.77、全国は2.3でした。

< 感染性胃腸炎 >

昨年は、第43週から増加の兆しが見られ、第51週の定点あたり報告数は18.51と、今シーズンで最も高い値となりました。その後減少し、2009年第21週は4.66となりました。集団感染の報告はほとんどなくなりました。行政区別では瀬谷区(12.0)、港北区(7.14)、南区(7.0)が高くなっています。川崎市は7.12、神奈川県(横浜、川崎除く)は5.67、全国は6.81と、いずれも横浜市より高い値です。

< 伝染性紅斑 >

例年並みの水準で推移していましたが、第13週から増加し、第21週は定点あたり1.06と、例年より高めの水準となっています。川崎市は2.27でした。全国では、過去5年間の同時期と比較して低い水準で推移していて、第21週は定点あたり0.21でした。例年、6月頃が一番高いようですので、今後の動向には注意が必要です。

< 性感染症 >

性感染症は、産婦人科系の11定点、および泌尿器科・皮膚科系の15定点からの報告に基づき、1か月単位で集計されています。

4月は、3月に比べて全体としては横ばいですが、性器クラミジア感染症は男性がやや増加し、女性がやや減少しています。19歳以下の若年層については、男性は性器クラミジア感染症が2例、淋菌感染症が1例、女性は性器クラミジア感染症が2例でした。

### 【病原体定点からの情報】

市内の病原体定点は、小児科定点:8か所、インフルエンザ(内科)定点:5か所、眼科定点:1か所、基幹(病院)定点:3か所、の計17か所を設定しています。検体採取は、小児科定点8か所を2グループに分け、4か所ごと毎週実施し、インフルエンザ定点は特に冬季のインフルエンザ流行時に実施しています。眼科と基幹定点は、対象疾患の患者から検体採取ができた時に随時実施しています。

#### < ウイルス検査 >

2009年5月に病原体定点から搬入された検体は、小児科定点36件(鼻咽頭ぬぐい液29件、糞便4件、直腸ぬぐい液3件)、眼科定点1件(結膜ぬぐい液)、基幹定点2件(糞便2件、髄液1件)でした。患者の臨床症状別内訳は、小児科定点は気道炎19人、胃腸炎(下痢・嘔吐含む)7人、伝染性紅斑症5人、発疹3人、口内炎1人、ヘルパンギーナ1人、眼科定点は急性出血性角結膜炎1人、基幹定点は胃腸炎2人でした。

6月10日現在、小児科定点では、気道炎患者2人と胃腸炎患者1人からアデノウイルス2型、別の気道炎患者1人からアデノウイルス(型未同定)、口内炎患者1人からヘルペスウイルス1型が分離されています。これ以外にPCR検査では、小児科定点の気道炎患者1人と発疹患者1人からアデノウイルス3型、胃腸炎患者2人からアデノウイルス2型とアデノウイルス41型、伝染性紅斑患者5人と発疹患者1人からヒトパルボウイルスB19型、ヘルパンギーナ患者1人からコクサーキーウイルスA10型、発疹患者1人からコクサッキーウイルスA9型が検出されています。

その他の検体は引き続き検査中です。

#### < 細菌検査 >

5月の感染性胃腸炎関係の受付は3件で *Campylobacter jejuni* が2検体より検出されました。

菌株は8株で腸管出血性大腸菌および毒素原性大腸菌が各1件検出されました。

溶血性レンサ球菌咽頭炎の検体受付は6件でA群溶血性レンサ球菌が6件すべてで検出されました。

### 【新型インフルエンザの情報】

\* 2009年6月14日現在、新型インフルエンザ関連の検体の検査を359件行いました。

\* 新型インフルエンザ(A/H1N1)の感染患者は4名です。

#### 患者の概要

- 1 27歳 男性 6月6日確認
- 2 43歳 女性 6月11日確認
- 3 17歳 男性 6月12日確認
- 4 33歳 男性 6月13日確認